「人新世に生きること」をアンラーニングする

＜Question＞

もし、1900年代初頭に化石燃料が枯渇していたら？この場合、大規模な産業はなく、産業革命後の多国籍企業による生産もなく、おそらく自動車もないでしょう。

＜Context＞

化石燃料はいかにして使用不可能になったのか？
危機への予兆：「赤光（しゃっこう）現象」

赤光（しゃっこう）
〖名〗 赤色の光。赤い輝き。特に、夕方の太陽の赤い光。
→日本における「Red Light Phenomenon」の呼び名。化石燃料枯渇の現象を、世界が暮れていく様子、また沈んでいく太陽になぞらえたことでこの呼び名がついた。

化石燃料の枯渇、それは19世紀中東で始まったとされる。

最初の発見は当時のペルシャにて、滲み出した石油が赤く光っていたこととされている。メソポタミア地方の人々は、古くから石油や瀝青（れきせい・滲み出した石油が蒸発したところに残る炭化水素物質）を様々なものに利用していた。ところが、その油が突然、まるで中にルビーが入っているかのように、まるで生物として生きているかのように、赤く光り始めたのだ。この新種の赤く光る物質は炎で燃えず、原料の油や瀝青のような性質を持っているわけでもなかった。

1850年代になると、地元のペルシャ人はこれを「チェラーブ・デルメーズ（赤い光）」と呼ぶようになる。当初は一地方に限られた現象であったが、すぐに他の地方にも広まっていった。

一方、イギリスの地質学者や企業家たちも原料油を探す過程において、この新しい物質に出会うことになる。彼らはサンプルを採取し、分析のためにイギリスと北米に送っていった。地質学者たちは、赤色の光が一体何なのかほとんど何も知らなかった。

そして、科学者たちがそれを理解した時には、その赤光は世界を永遠に変えてしまうのだった。

*

我々はこの赤光について、遺伝子変異によって生まれた菌類の一種によってもたらされた現象であるという見解を持っている。化石燃料などの炭化水素と結合し生合成する性質を持つため、化石燃料は別の性質へと変えたわけである。一方で、生物学者たちは、赤光は比較的深い地下まで到達することができる微細な菌類から進化したものであると考えているため、その経緯については議論が分かれるところである。

その他に、今日の赤光についてわかっていることといえば、それがどの炭化水素と結合するかによって様々な形態になりえるということだ。そして、胞子の活動によって生まれる赤い輝きは、全ての赤光に共通して見られるものとなっている。

いずれにせよ、赤光が世界の化石燃料を征服することは不可避だったように思える。この菌は適応性が高く、精製所や炭鉱を守るために人々が懸命に努力したにもかかわらず、たった半年で世界中に拡散してしまったのだ。

例えば、「ニュージャージー港の感染（1909年）」で判明したのは、加工された化石燃料にさえも赤光の胞子はコロニーを作ることができるということだ。同じ船が石炭を積んでいる最中に、船から降ろされたサンプルジャーが割れ、1週間以内にニュージャージー港の船の石炭貯蔵庫はすべて赤く光り始め、スポンジ状の質感に変化してしまった。

もちろん、感染はニュージャージー港だけにとどまらず、交易路や人の移動によって、胞子はあらゆる場所に広がっていった。この現象によって急速に工業化が進んだ明治時代の日本では、機械を動かすための化石燃料が消滅し、結果として建設されたばかりのインフラや工場が全て停止することになった。

*

以上のような経緯を辿って世界中の化石燃料の採掘は、赤い光の出現によって事実上すべて停止されることとなった。いずれ赤い光に変化してしまう物質を掘り起こすことは、もはや無意味な努力とされるようになったのだ。

もちろん、薪やアルコールなど、一般消費者向けの可燃物質はまだ存在していたが、やはり産業を営むには無理があった。ちなみに、赤光そのものは一部の細菌を除いて人間や他の生命体に害を与えることはなかった。また、赤光を利用するための搾取も試みられたが、それは全くの役立たずに終わった。それでも科学界はその菌類に執着することをやめなかったのだが、それは皮肉なことである。なぜなら、菌糸知能論者によると、赤光の「人間による利用不可能性」は、それ自体が赤光による「意図的なる進化の結果」だとする見解が存在するからだ。

＜Guideline＞

1. **Everything is connected**
   物事、デザイン、問題は全てが繋がっています。世界を「複雑な繋がり」として存在していると考えてみましょう。私たちがデザインする際には、「こちらの世界」から始めるのではなく、「あちらの世界」に根ざし、その複雑性から思考を始めることが不可欠です。

   また、この実験は「普通」や「当たり前」を再考するためのものです。自分の思考やフレームを一旦手放し（アンラーンし）、常識や期待の枠を飛び出してみてください。これから作る別の世界の中に立って、その内側から新たな世界を考えてみてください。

2. **No band-aid, please!**
   複雑な問題に対する「技術的な応急処置」は、私たちが求めているものではありません。すべて

を解決してくれる技術というものが、本当に存在するのでしょうか？コロナやワクチンについて考えてみましょう。ワクチンだけでは、世界的な大流行という問題を解決することはできませんでした。パンデミックは私たちの生活や社会を不可逆的に変え、医療システムだけでなく、仕事、都市、共有スペース、旅行、結婚などについても考えさせました。

複雑な問題には複雑な解決策が必要です。技術的な介入もあり得ますが、豊かな想像力を武器に短略的な解決案以上のものを考えてみましょう。

3. **Challenge your point of view.**
私たちが提示する「もしも（what if）」の世界では、あなたは今のままでは存在しえないでしょう。世界を構築する際には、そこに生きる誰かの、そこに住む人々の視点にも立ってみてください。同時に、より公平な世界を想像するように心がけてみてください。あなたが構築する世界では、あなたが描く登場人物だけでなく、その他の、または全ての人々に利益をもたらすような、そういった世界を想像できるように挑戦してみましょう。

私たちの想像力は、当たり前となった階級や衝突が頻繁に起きる世界観の中に閉じ込められがちです。簡単なことではありませんが、そのような「人間の本質」についての偏見を捨ててみましょう。少なくとも、現在のパターン（例えば、大衆の抑圧と貧困によって少数の権力者が豊かになるといったような）を繰り返さないような世界を構築してみましょう。

4. **There is no correct process to create a world.**
世界を構築するのに正しいプロセスはありません。何から始めてもいいのです。例えば、住宅、食べ物、祭り、科学、お金、労働、美学、ガーデニング、愛などの特定のテーマに注力して思索を始める方法も良いかもしれません。「化石燃料に頼らない別の世界ではどうなっていたか」という問いから想像する方法も有効かもしれません。

歴史的な背景を描く必要はありませんが、あなたが作った世界では、歴史が意味を持つ必要があります。また、自分の好きなテーマについては、より詳細にデザインし、それ以外の部分は曖昧なままでもかまいません。

5. **Beyond human-centered thinking.**
このワークショップでは、人間や人間社会だけを対象にしているわけではありません。私たちは「人新世」をアンラーニングし、人間中心主義から脱却する必要があるのです。

世界を想像しながら、その社会にとって共存はどのようなものであるかを考えてみてください。そのような世界では、いたるところに「猫や鳩に餌を与えないでください」という看板があるでしょうか？人間と野生動物の空間は明確に分け隔てられているでしょうか？動物園は存在するでしょうか？農業は工業化され、食料品はプラスチックに包まれてチェーンのスーパーマーケットで販売されているでしょうか？もしそうでないとしたら、それはどのようなものでしょうか？

6. **Pay attention to the unimaginables.**
「あなた」が想像することがが難しい、当たり前にすることがが難しいと思うものに注目してください。なぜそれが「あなた」にとって難しいのか、なぜその難しいものを当たり前にしたいと思うのか、考えてみてください。

これは、自分の中に存在する「暗黙のバイアス」を知るための反射的な練習でもあるのです。